

# 〈妊娠小説〉としてのブツダ伝

——日本古典文学のひながたをさぐる

荒木 浩

## 1 「妊娠小説」という定義と『源氏物語』

『妊娠小説』（筑摩書房、1994年）<sup>1</sup>という快著がある。文藝評論家・斎藤美奈子の単著デビュー作である。斎藤は、一風変わったこのタイトルについて、「『妊娠小説』とは「望まない妊娠」を搭載した小説のことである」と端的に定義し、冒頭で、次のように述べている。

小説のなかで、ヒロインが「赤ちゃんができたらしいの」とこれ見よがしに宣告するシーンを、そしてそのためにヒーローが青くなってあわてふためくシーンを、あなたも目撃したことがあるでしょう。[……]「妊娠小説」とは、いわば、かかる「受胎告知」によって涙と感動の物語空間を出現せしめるような小説のこと、であります。しかしながら、旧来の文学史や文学研究、文学批評はこのジャンルを今日まで頑として黙殺しつづけてきました。まったく遺憾なことである、といわなければなりません。

ここで提示される「受胎告知」は、聖者の *annunciation* とあえて同じコトバを用いつつ、狙いはその真裏にある、といえるだろう。斎藤は、この基準から、森鷗外の『舞姫』（1890）を「わが国最初の「近代妊娠小説」だ」と看破する。そして島崎藤村の『新生』を「今日に残る「出産系」の名作」と規定し、両作を「妊娠小説」の「父」と「母」だと呼ぶ。このように、本書は、近代文学のしかつめらしい構図と歴史をシニカルに茶化しながら、これまでのカノンを転覆し、新しい小説史へと刺激的なパースペクティブを提供する。

しかし、私にとってより興味深いのは、本書が展開する「妊娠小説」論の叙述を参照することで、日本古典文学の構図といくつかの情景が、別の光で照らし出されることである。たとえば『源氏物語』にも、「赤ちゃんができたらしいの」という「受胎告知」を想起させる、「妊娠小説」顔負けの著名な二つの場面がある。しかもそれは、遠く離れた場面に配置され、時間も状況も異にするエピソードながら、それぞれ密接に呼応し合って、物語の基軸を支えているのである。

## 2 『源氏物語』の妊娠小説——その1 桐壺帝・光源氏・藤壺

その一つは、第一部の若紫の巻にある。若紫巻は、その始まりに、まだ十代の光源氏が「<sup>とを</sup>十ばかりにやあらむと見え」る紫の上を垣間見て、初々しい恋心を抱く場面を描く<sup>2</sup>。多くの「源

<sup>1</sup> 引用は1997年刊のちくま文庫版より。

<sup>2</sup> 以下、『源氏物語』の引用は『新潮日本古典集成』（石田穰二・清水好子校注）による。

氏絵」が残されていることから知られるように、それは『源氏物語』の中で、もっとも人気のあるシーンの一つである。その時光源氏は、愛らしい幼女の面ざしに、父桐壺帝の後妻・藤壺の面影を透かし、義母へのあこがれをあらためて強く喚起される。藤壺は、じつは紫の上の叔母にあたり、その類似には根拠があった。そして若紫巻は、紫の上への純情な思いと裏腹に、光源氏が藤壺に対して抱き続けた、あやにくな積年の思いを果たす場面を続けて描くことになるのである。

「藤壺の宮、なやみたまふことありて」、宮中を退出した時のことだ。光源氏は、「かかるをりだにと」気もそぞろ、「昼はつれづれとながめ暮らして、暮るれば、王命婦を責めありきたまふ」。この王命婦という女房が手はずを付け、「いかがたばかりけむ、いとわりなくて見たてまつる」。光源氏は強引に藤壺と逢瀬を果たした。ただし藤壺の心内語に「あさましかりしをおぼしいづるだに、世ととも御もの思ひなるを」とあるので、どうやら初めてのことではなかったらしい。

しかし物語は、その初会ではなく、この「あやにくな<sup>みじかよ</sup>短夜」についての<sup>じょうじょう</sup>みづらと叙述する。それには理由があった。藤壺はこのあと、「なやましさもまさりたまひて」体調の異変に気が付き、妊娠を覚知するからである。彼女は「人知れずおぼすこともありければ、心憂く、いかならむとのみおぼし乱」れ、とうとう「三月になりたまへば、いとしるきほどにて、人々見たてまつりとがむる」。藤壺はこの夜、夫である帝ではなく、その子光源氏の子を宿してしまったのである。

ヒーロー光源氏への「受胎告知」は、「これ見よがし」の「宣告」ではなかった。それは、ブツダや聖徳太子が母に受胎した時のように、「夢」で果たされる。ただし母への告知ではない。父の夢であった<sup>3</sup>。その意味で、母にもたらされる *annunciation* とはより対比的である。物語は「中将の君 [=光源氏] も、おどろおどろしうさま異なる夢を見たまひて、合はする者を召して問はせたまへば、及びなうおぼしもかけぬ筋のことを合はせけり」と語る。そして彼は、夢合わせによって、その恐ろしい妊娠を知るのである。

この驚嘆すべき姦通によって「青くなってあわてふためく」のは、ヒーローだけではない。秘密を共有するヒロイン、藤壺の方がより深刻である。生まれる子の認知をめぐる、父・桐壺帝は自分の子であると疑いもしない。その美しさが光源氏にそっくりだと、当の光源氏と藤壺に自慢して、真実を隠す二人を<sup>きょうく</sup>恐懼させる。

例の、中将の君 [=宮中に参上した光源氏]、こなたにて御遊び [=音楽] などしたまふに、<sup>いだ</sup>抱き出でたてまつらせたまひて、「御子<sup>みこ</sup>たちあまたあれど、そこをのみなむ、かかるほどより明け暮れ見し。されば思ひわたさるるにやあらむ、いとよくこそおぼえたれ。いとちひさ

<sup>3</sup> 藤井由紀子「〈懐妊をめぐる夢〉の諸相——説話と物語のあいだ」（荒木編『夢見る日本文化のパラダイム』法蔵館、2015年所収）は、懐妊譚の夢について、古代・中世の説話と物語について広範かつ詳細な調査を行い、「本朝の説話集に見られる懐妊譚の霊夢は、基本的には、聖なるものと母との、他者を介さないダイレクトな交渉を示すもの」であり、「聖母マリアの処女受胎に代表される、「より広い「感精譚」と呼ぶ話型」 [=河東仁『日本の夢信仰——宗教学から見た日本精神史』玉川大学出版部、2002年]の系譜に連なる」ことを指摘し、原則は母の夢として果たされる受胎告知が、『源氏物語』を契機として「父の夢」に変わってしまうこと、そして「それは、〈密通〉による懐妊を示す夢なのである」と論ずるなど、すぐれた史的考察を行っており、本稿の以下の考察に示唆的である。

きほどは、皆かくのみあるわざにやあらむ」とて、いみじくうつくしと思ひきこえさせたまへり。中将の君、面おもての色かはるこちして、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがたうつろふこちして、涙おちぬべし。物語などして、うち笑まみたまへるが、いとゆゆしううつくしきに、わが身ながら、これに似たらむはいみじういたはしうおぼえたまふぞ、あながちなるや。宮は、わりなくかたはらいたきに、汗も流れてぞおはしける。中将は、なかなかなるこちの、かき乱るやうなれば、まかでたまひぬ。(紅葉賀巻)

下線部の光源氏の動揺を、Royall Tyler は「go pale」と訳しており、光源氏は文字通り「青くなってあわてふため」いて描かれる。

### 3 『源氏物語』の妊娠小説——その2 光源氏・柏木・女三の宮

それから20年以上が過ぎ、「赤ちゃんができたらしい」という告知の恐怖<sup>4</sup>が、引き写しのようになり返された。今度は、立場を変え、取り残されるのは光源氏のほうである。かつて頭中将と呼ばれた光源氏のライバルの息子・柏木が、源氏の兄・朱雀院から賜った後妻の女三の宮と密通をして、妊娠させてしまうのである。

女三の宮もまた(紫の上のように)藤壺の姪である。それ故に、当初は、光源氏にも結婚を望む気持ちがあった。しかしいざ迎えてみれば、若々しいだけのその様子に、彼はつとに失望していた。ところが柏木もまた、ひそかに女三の宮の降嫁を願っていたらしい。柏木は、すでに四十の賀を終えた初老の光源氏へ彼女がわたることを悔しく思い、依然、思いを強く潜在させ続けていたのである。

折しも光源氏の大邸宅・六条院で行われた蹴鞠の折、格好の機会が訪れた。猫のいたずらである。「唐猫からねこのいと小さくをかしげなるを、すこし大きな猫追ひ続き、にはかに御簾みすのつまより走り出づるに」、「猫は、まだよく人にもなつかぬにや、綱いと長く付きたりけるを」、その綱が引かかかって、「逃げむとひこしろふほどに、御簾きはのそばいとあらはに引きあけられ」、すっかり中が見えてしまう。柏木は、部屋の中に「几帳きさの際すこし入りたるほどに、袿姿うちきにて立ちたまへる」女三の宮の姿を、「姿つき、髪のかかりたまへる側目そばめ」まで、「夕影なればさやかならず」も、垣間見てしまった。そして彼は、一目惚れして本当の恋に落ち、病いのように、思いを募らせていくのである(若菜上巻)。

柏木は、小侍従という女房を責め、光源氏不在の折に「何心おほのごももなく大殿籠りにける」女三の宮の居所に忍び込んで近づき、光源氏の来訪かと目覚めた彼女を抱きしめる。柏木は篤く口説いて思いを伝え、「なかなかかけかけしきこと [=好色めいたこと] はなくて止みなむ、と思ひしかど」、その激情を抑えることはできなかった。彼は女三の宮の高貴な美しさに魅せられ、「さかしく思ひしづむる心も失せて、いづちもいづちも率ひて隠したてまつりて、わが身も世に経るさまならず、跡絶あとえて止みなばや、とまで思ひ乱れぬ」。とうとう思いを遂げ、そしてあの有名な猫の夢を見る。

<sup>4</sup> 拙著『かくして『源氏物語』が誕生する——物語が流動する現場にどう立ち会うか』「はじめに——源氏物語論へのいざない」(笠間書院、2014年)、拙稿「日本古典文学の夢と幻視——『源氏物語』読解のために」(前掲『夢見る日本文化のパラダイム』所収)参照。

「ただいささかまどろむともなき夢に、この手馴らしし猫の、いとらうたげにうち鳴きて来たるを、この宮にたてまつらむとて、わが率て来たるとおほしきを、何しにたてまつらむと思ふほどに、おどろきて、いかに見えつるならむと思ふ」。このいささか曖昧な猫の「夢」こそが、光源氏がかつて藤壺の時に見たような、「受胎告知」の夢であったと後にわかる。

密通を犯した柏木は、「青くなってあわてふためく」。それは帝より怖い、光源氏への恐れであった。「帝の御妻をも取りあやまちて、ことの聞こえあらむに、かばかりおほえむことゆゑは、身のいたづらにならむ、苦しくおほゆまじ。しかいちじるき罪にはあたらずとも、この院に目をそばめられたてまつらむことは、いと恐ろしくはづかしくおほゆ」。そうして女三の宮は妊娠した。彼女がルーズに措き散らかした柏木からの恋文を見てその不貞を知った光源氏は、六条院の試楽に訪れた二十代の柏木を「さしわきて、空酔ひをしつつ」、自らの老いを茶化しながら諷して見やった。すでに深く恐れを抱いていた柏木は、「たはぶれのやうなれど、いとど胸つぶれて」、やがて重病を患い(以上の引用は若菜下巻)、ついに死んでしまうのである(柏木巻)。

やがて薫が生まれた。五十日の祝いの時、光源氏は、薫をその手に抱きながら、結句同じ立場となった、父桐壺帝へと思いを馳せる。あの時、父も知らず顔を作りつつ、すべてを見据えて、我が裏切りを呑み込んでくれていたのではなかったか。光源氏は、深い懷疑と懺悔にさいなまれ、「おまえの父と同じ轍を踏まぬように」という白居易の「自嘲」を口ずさむ<sup>5</sup>。近時、その書き換えが話題になった<sup>6</sup>、『源氏物語絵巻』柏木巻の著名な場面である。

\*

こうして光源氏物語の中核には「妊娠小説」的プロットが重要な意味を持って存していた。密通で生まれた不義の子の懐妊が、母のみならず、本当の父にも夢告の形で知らされる、という新しいプロットである。それはまさしく物語史における創出であり、また新たなひながた——文学伝統となった。

さて、少し突飛に聞こえるかも知れないが、私見では、この二つの光源氏譚造形の中核に、結婚と出家をめぐる、ブツダ伝の参照があると考えている。すなわち、ほとんど注意されないことだが、ブツダの伝記にも、重大な「妊娠小説」的要素が潜在していたのである。以下にそのことを確認していこう。

#### 4 ブツダ伝と光源氏

光のように美しい皇子・光源氏の造形には、金色に光る美しい王子であったブツダ(仏については、出家前を含め、以下この呼称を用いる)の伝記が深く関係している。その詳細は、旧稿で論じたが<sup>7</sup>、とりわけその影響は、『源氏物語』第一部で、光源氏が栄華の象徴として築き上げる六条院に象徴される。皮肉なことに、柏木が女三の宮を垣間見、また破滅の死へ向けて、

<sup>5</sup> この場面についても、前掲注4の拙著と拙稿で言及した。

<sup>6</sup> 徳川美術館特別展「全点一挙公開 国宝 源氏物語絵巻」(2015年11月)図録など。

<sup>7</sup> 荒木注4前掲書『かくして『源氏物語』が誕生する』第6章「〈非在〉する仏伝——光源氏物語の構造」。なお丘山万里子『ブツダはなぜ女嫌いになったのか』(幻冬舎新書154、2010年)は、独自の視点で仏伝を読み解き、『源氏物語』との類似点に言及している。

光源氏に擲掬されて睨まれたのも、この邸宅であった。

ブツダと光源氏との相即を、旧稿を敷衍しつつ述べれば、以下の通りである。

六条院は、4町にわたる寝殿の集合体として構築された。4ブロックの右下・東南を春の町の館とし、以下時計回りに、西南の秋の町、西北の冬の町、そして東北の夏の町と配置される。それぞれの館には、季節を象徴した光源氏ゆかりの女性が住んでいる。春は最愛の紫の上と明石姫君（光源氏の娘）、のちに女三の宮が降嫁する。秋は秋好中宮（六条御息所の娘、光源氏の実子冷泉帝の中宮）、冬は明石の君（光源氏の愛人で明石姫君の母）とその母尼君、そして夏には花散里（光源氏の側室、父桐壺帝の妃・麗景殿女御の妹）、夕霧（光源氏の長男）、のちに玉鬘（光源氏の愛人夕顔の娘）が加わる。

光源氏は春の町に住み、そこは「生ける仏の御国」と呼ばれた（初音巻）。野分巻では、春の館を出て、春→秋→冬→夏とめぐって秋の大風（野分）の被害を見舞う。つまり物語の文言は、光源氏を生けるブツダ（Tyler 訳では文字通り「the land of a living buddha」と記す）と描き、ブツダたる光源氏の「春秋冬夏」という、奇妙な四季循環（春夏秋冬でも東西南北〔春秋夏冬〕でもなく）を体現する。それはまた、光源氏の愛する女性達と一体的な時空であった。

こうした四季の邸と女性の配置は、ブツダ伝を応用してはじめて、全的に解明できる。たとえば12世紀の『今昔物語集』は、『過去現在因果経』などに遡る漢訳仏典<sup>8</sup>をふまえつつ、冒頭の3巻で、日本で初めての組織的なブツダの伝記を描き出す。『今昔』の描く出家前のブツダは、女性を厭い、正妻のヤショーダラー（漢訳や『今昔』では耶輸陀羅）さえも十分に愛することができず、厭世の思いを固め、いつしか出家を欣求する。巻一-四では、ブツダはその夜、三つの不吉な夢（月が地に墮ちた夢、牙齒が抜け落ちた夢、右の臂を失った夢）を見て不安を訴える妻・ヤショーダラーをなだめ、ひそかに城を出て、修行の旅に出発した。

ところがその『今昔』の巻一-四の説話では、出家前夜の逸話に直続して、彼には3人の妻がおり、それぞれを、季節ごとの「三時殿」に住ませたという、相矛盾するような別系列の内容を併記する。ブツダのポリガミーを語るこの後半の逸話は、私たちの常識的なブツダイメージからは違和感があるかも知れないが、伝承自体はめずらしいものではない。『ジャータカ』因縁物語にも遡源するものである。「三時殿」は〈温（暖）／涼・寒・暑〉という三季<sup>9</sup>、すなわち雨季のような（温かい、もしくは涼しい）時期、寒い冬、暑い夏をそれぞれ快適に過ごせるような、三つの住まいであると説明される。三時は、東アジアの四季から見れば、温＝春、涼＝秋、寒＝冬、暑＝夏と引き当てられる。実際に一部の漢訳経典は「春・秋・冬・夏」の「四時殿」だったと説く。それは、春から秋、冬から夏、そしてまた春へ戻るという、六条院の奇妙な循環と合致する。ただし春秋一体の三時殿には、季節ごとにブツダの妻が配されるが、春秋分離して対比する六条院では、秋のみ光源氏の妻妾ではない、ということも示唆的である。

こうして、春秋冬夏という季節循環と、四季の館ごとの女性の帯同という『源氏物語』六条院の主眼が、ブツダ伝の援用によって、唯一・全的に説明される。

ブツダは、三時殿と妻とを捨てて出家し、悟りを求めて完遂する。しかし『源氏物語』第一

<sup>8</sup> 以下に引用される漢訳仏典は、特に注意しない限り大正新脩大蔵経によるが、諸本により本文批判を加えたり、稿者の翻訳によって示したりする場合がある。

<sup>9</sup> 『大唐西域記』は「如来の聖教」（仏陀の説く経文）では、インドの1年は三時に季節を分かち描かれると説明する。このあたり前掲注4の拙著参照。



部は、六条院を、俗人・光源氏の人生の栄華の完成に位置づけた。光源氏は、最初の正妻・葵の上を失ってから、永遠に出家を願望しつつ（物語の表舞台では）果たされない。むしろその未完成を主題として物語を生きる。そして第一部のハッピーエンドの構築において『源氏物語』は、四季の邸宅とすべての愛する女性達をブツダのように捨てるのではなく、その反対に、あらたに作り、集約する俗人としての光源氏を描く。あべこべである。本質において双子のようなブツダと光源氏には、そういう逆さまの照応がある。

## 5 ブツダ伝と「妊娠小説」

こうした照応が、逆に、ブツダ伝の陥穽を写し出す。「妊娠小説」というプロットの潜在である。ブツダは、ヤショーダラーとの間に、ラーフラ（漢訳では羅睺羅）という一子をなした。しかし、仏典を見ると、その出生には衝撃的な噂があった。ラーフラは、不倫によって懐妊した、という懐疑である。

日本で尊重された『大智度論』は、『羅睺羅母本生経』を引いて次のように説明する。太子時代のブツダには二人の夫人がいた。耶輸陀羅（＝ヤショーダラー）はその内の一人で、羅睺羅（＝ラーフラ）の母であった。菩薩（＝ブツダ）が出家した夜、彼女は妊娠を自覚する（自覚妊身）。ところがブツダは出家してしまい、6年間の苦行に入っていた。不思議なことに、ヤショーダラーもまた、その6年間、懐妊したまま「不産」であったという。釈迦族の人々は、「菩薩は出家したのに、なぜ妊娠をしたのか」と詰問した。ヤショーダラーは、「私は何の罪も犯していない。私が孕んだこの子は、間違いなく太子の子です」と反論する。人々が「ではなぜいつまでも産まれないのだ」と追って詰ると、ヤショーダラーは「私には分かりません!」と応えた。そしてブツダの苦行が終わり、出家後6年を経たブツダが成仏（＝成道）した夜、ようやく一子・ラーフラが生まれたという。

人々の疑いは無理もなかった。出家前、ブツダの道心ぶりは「不能男」のようであったと漢訳仏典は説明する。たとえば、先に引いた『今昔物語集』など、日本でブツダ伝形成の基礎ともなった重要経典『過去現在因果経』（奈良時代の『絵因果経』がよく知られるだろう）によれば、太子（＝ブツダ）は、妻との「夫婦道」が不在で妓女に近づくこともなく、ただ世を厭うばかりだったという。そんな太子を憂え、せめて国のために跡継ぎの一子を残してくれと願う父王の言葉とその気持ちに答え、太子は、仰せの如くとその場で妃の腹を左手で指し、懐妊が果たされた<sup>10</sup>。

『過去現在因果経』の異訳とされる『太子瑞応本起経』の伝えるところでは、太子はヤショーダラーを近づけず、「不能男」ではないか、という疑いが持たれていた。そんな中で太子は、妻の腹を指し、この子は6年後に生まれるだろうと予言する。そして妻は妊娠した。日本中世の仏伝資料『教児伝』<sup>11</sup>（14世紀成立）によれば、かつて太子を愛して戯れた女房たちは、彼の「御隠所ニハ」「白蓮花コソイツクシク出生」していたとはやし立て、子供の父が太子だなんて

<sup>10</sup> なお日本の中世仏伝『釈迦如来八相次第』（14世紀成立、真福寺善本叢刊）では「右ノ御手」で腹を指す。「左手」とする『過去現在因果経』以下と異なるが、「太子即以右手指其妃腹。便覺有娠」とする『仏祖統記』巻二「出父家」の所説に従っている（巻三十四にも略述）。

<sup>11</sup> 『天野山金剛寺善本叢刊第一期 第二巻 因縁・教化』（後藤昭雄監修、荒木浩・近本謙介編集、勉誠出版、2017年）に金剛寺本の翻刻と解題を付した。

ことはあり得ないと非難したという。漢訳仏典『雑寶藏經』（道世『法苑珠林』にも引く）によれば、ヤシヨーダラーの妊娠を知った宮中の侍女たちは、一斉に口を極めて彼女を辱め、「怪哉大悪耶輪陀羅」となじった。電光という、ヤシヨーダラーの叔母の娘は、彼女の不貞は親の家を辱め台無しにする行為だと罵ったという。

さて『大智度論』所引説話には続きがあり、ヤシヨーダラー不貞の批判に反論し、父王に進言する女性が描かれる。ブッダのもう一人の妻クピヤである。クピヤは、自分はずっとヤシヨーダラーの側におり、彼女の無実を知っている。子供が生まれるのを待って、その子が父ブッダに似ているかどうかを見てから判断しても遅くない（願寛恕之。我常与耶輪陀羅共住、我為其証、知其無罪。待其子生、知似父不、治之無晚）とクピヤは王に助言する。王はその意見を容れ、寛容に結論を待つことになった。そして六年が経ち、ラーフラが生まれた。彼がブッダにそっくりだったので、父王は安堵し、群臣にその旨を語った（王見其似父、愛樂忘憂。語群臣言、我兒雖去、今得其子、与兒在無異）という。

不義を疑われた子ラーフラと本当の父？ブッダとの類似をその父王が納得し、ブッダ父子の实在を証すこの構造は、再び『源氏物語』を引き寄せる。自分の子供として生まれたと信じる父桐壺帝が、光源氏と藤壺との実子（のちの冷泉帝）を抱き上げて愛でる紅葉賀巻の場面である。

四月に内裏へ参りたまふ。ほどよりは大きにおよすけたまひて、やうやう起きかへりなどしたまふ。あさましきまで、まぎれどころなき御顔つきを、おほし寄らぬことにしあれば、またならびなきどちは、げにかよひたまへるにこそはと思ほしけり。〔……〕かうやむごとなき御腹に、同じ光にてさし出でたまへれば、疵なき玉と思ほしかしづくに、宮〔＝藤壺〕はいかなるにつけても、胸のひまなく、やすからずものを思ほす。

それは、自分の子であると信じて疑わない父・桐壺帝が、ほら、おまえにそっくりだろうと光源氏と藤壺に自慢して、密通した二人が「青くなってあわてふためく」先引場面へと接続する。

〔帝は〕「御子たちあまたあれど、そこをのみなむ、かかるほどより明け暮れ見し。されば思ひわたさるるにやあらむ、いとよくこそおぼえたれ。いとちひさきほどは、皆かくのみあるわざにやあらむ」とて、いみじくうつくしと思ひきこえさせたまへり。中将の君、面の色かはるこちして〔……〕わが身ながら、これに似たらむはいみじういたはしうおぼえたまふぞ、あながちなるや。（紅葉賀巻）

こう並べると、『源氏』の叙述は、ブッダの父が、ようやく生まれたヤシヨーダラーの子供を、ブッダとそっくりの容姿だから、その実子と認めたというエピソードのパロディのようにさえ見えてくる。しかし『源氏物語』におけるその類似は、関係する人々すべてにおいて、より大きな悩みの始まりであった。

じつは、ブッダの場合も親子の類似は本当の解決にはならなかった。『大智度論』所引説話では、父の王は、生まれたラーフラがブッダに似ていたことをもって我が孫と認め、ヤシヨーダラーはひとまず罪を免れた。しかし依然「悪声満国」だったという。王のいささか甘い認定

だけでは、彼女の不義の噂を絶やすことはできなかったのである。

その噂の背景に、ブッダの従兄弟と所伝する（ヤショーダラーの兄弟ともいう）デーヴァダッタが、ブッダ成道後、ヤショーダラーを誘惑し、彼女はこれを拒絶した、との伝承もある<sup>12</sup>。前に引いた『雑宝蔵経』は、より烈しい説話を記す。ヤショーダラーとその子の処罰のために、人々は、穴を掘って火を燃やし、母子ともにその火坑に投げ入れてしまえ、と決議した。悲嘆したヤショーダラーは、「この子は、決して他の男との子ではない。6年間私の胎内に留まっていた。私のいうことが嘘であれば、炎が私の身を焦がし、もし正しければ、この火は消滅するだろう」、そう言って子を抱いて火中に入ると、火はたちまち清らかな池に変じ、母子はその蓮の上にあった。そしてようやく彼女は、その不倫の疑いを晴らしたと伝えている。

『大智度論』所引説話の展開は違う。ヤショーダラーの「悪声」が払拭されるのは、ラーフラが七歳になり、ブッダが母国カピラヴァストゥに戻ってきた時のことである。親子の証明のため、母に命じられたラーフラが「歡喜丸」を持って父に近づく。ところがブッダは、他の五百羅漢と同じ姿に変じて紛れていた。そんなブッダをラーフラは見事に発見して、歡喜丸を捧げることができた。それが親子の証明であった。

このように、ブッダの子ラーフラの出生は、ヤショーダラーの不倫をめぐる「妊娠小説」の要素を根深く潜在させ、しかもそれは、ほとんど『源氏物語』の先蹤<sup>せんしょう</sup>であった。もちろんブッダの「妊娠小説」的問題は、母子ともに厳しいイニシエーションを経て、聖的なやり方で解消された。多くの仏伝経典が説くように、ブッダは、その名のとおり、最高の悟りを得べき存在だったからである。彼が生まれた時、バラモンやアシダ仙人によって予言がなされた。彼には、在家として理想の王となるか、それとも出家して悟りを得るか、二つの可能性が開けていたという。しかしいずれの予言者も、彼は疑いなくブッダになるべき人だと断じた。ブッダは、運命付けられた教祖であった。対する光源氏は、幼子の時、高麗の相人によって、あたかもブッダの占いを裏返すかのような予言が与えられた。王の上無き位に就けば国を揺るがし、臣下となって王を補弼しても相応しからぬ、というのである。それは究極の二重否定・ダブルバインドの謎かけで、ブッダの占いの反転であることを共示すると私は考えるが、その占いには、結句、出家という選択自体が描かれない。そうして物語上の彼は、出家を希求して果たされない、裏返し<sup>うら返し</sup>のブッダとして生きることになる<sup>13</sup>。光源氏が受け止めたブッダ「妊娠小説」の独自展開も、このコンテキストから理解される。

## 6 『源氏物語』と羅睺<sup>ラーフラ</sup>の懐胎との直接的関連

ところで『源氏物語』の読者には、はたしてこの構図は伝わっていたのだろうか。現代の研究者も読者も、こうしたブッダ伝の「妊娠小説」を前提に『源氏』を讀解することはないようだが、しかし、中世には、両者について、明確ななぞらえがある。

たとえば、藤壺と光源氏の間に出た皇子（後の冷泉帝）の出生（紅葉賀巻）について、ブッダ伝の妊娠が引き合いに出されることがあった。『源氏物語』に関する河内方の所説をまとめ

<sup>12</sup> 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻第十。

<sup>13</sup> 前掲注4拙著『かくして『源氏物語』が誕生する』第6章参照。



た『原中最秘抄』（1364年成立）という注釈である。『原中最秘抄』は、『源氏物語』紅葉賀巻の「二月十よ日の程におとこ宮生まれ給ぬ」（二月十余日に男の御子が生まれた）という本文について解釈し、若紫巻の光源氏・藤壺の密通と妊娠から、この出産まで、「然間彼懷孕の始と皇誕生のいまを勘にとしは三ヶ年月は廿六月なり」と計算する<sup>14</sup>。冷泉は、足かけ3年の懐妊で、26ヶ月経って生まれた、というのである。この奇妙な計算は、次のような巻の年時を追いかけた結果らしい。

- ・若紫巻春の末（中略）三月はかりになれは…
- ・末摘花巻にそのとしくれ歩春になりぬ。
- ・紅葉賀の行幸は神な月なり其年くれ春たちて源氏君朝拝に〔……〕
- ・この月〈正月也〉はさりととも待につれなくてたちぬといひて同二月十余日のほとに〔……〕



平井仁子は、巻ごとの関係をこのように図示し、「この各巻にある年の代わり目に関する叙述を物語の順に忠実に追うと、冷泉院は懐妊後2年2ヶ月にして生まれたということになるのである」と説明した<sup>15</sup>。

『原中最秘抄』の編集者・行阿は自慢げに述べる。この驚くべき事実はこれまで誰も気付かなかった。自分が初めて見つけた事実である。私は七十になるまでいくどもこの物語を読み享受してきたが、この発見が一番のものだ。そう矜持を示して彼は、「和漢先例条々」を次のように挙げている。

応神天皇御母神功皇后御懐妊八ヶ年〔……〕  
 聖徳太子母后経<sub>ニテ</sub>御懐妊十二月〔……〕  
 武内大臣〔……〕被<sub>レ</sub>懐妊<sub>ニ</sub>こと六十年〔……〕  
 昔時瞿夷今日耶輸乃是天女也耶輸陀羅之子羅睺尊者は仏出家之後六年而誕生大臣等疑<sub>レ</sub>之一日耶輸多羅懷<sub>レ</sub>子<sub>ヲ</sub>投<sub>レ</sub>火<sub>ニ</sub>全不<sub>レ</sub>燒<sub>テ</sub>

最後に挙げられた前例が、ブッダの子ラーフラの六年懐胎説である<sup>16</sup>。ただし、このように巻序の時間をそのまま年月に置き換える年数計算の方法は、一条兼良（1402-1481）によって完璧に否定された。兼良は『源氏物語年立』（1453年成立）を著し、序で次のように述べている。

<sup>14</sup> 『原中最秘抄』の引用は源氏物語大成による。なお以下本第6節の分析については、拙稿「出産の遅延と二人の父——『原中最秘抄』から観る『源氏物語』の仏伝依拠」（『国語と国文学』2018年2月号）で別の観点から詳述したことに関わる。併せ参照されたい。

<sup>15</sup> 平井仁子「『源氏物語』の時間——「花鳥余情」以前」『実践国文学』第9号、1976年2月。

<sup>16</sup> この言及は、先引『雑宝蔵経』もしくは同経を引く『法苑珠林』に重なり、『教児伝』にも類似した一節があるが、注意すべき相違点もある。注14所掲の拙稿参照。

漢家の詩文には、年譜目録といふものありて、所作の前後昇進の年月をかうがへみるに、その便をえたり。しかるに源氏物語五十四帖において、諸家の注釈これおほしといへども、いまだ一部のとしだちをみず。

これによりて、冷泉院の御誕生、つねの人にかはる事なしといへども、旧説に三年胎内にましますといへり。

又かほる大将の昇進、たけ河紅梅よりのち宇治の巻のうつりに、相違のことおほし。水原河海の諸抄にも、筆をさしをき侍り。いま愚意のおよぶところ、いさゝか詩文の例になぞらへて、五十四帖のとしだちをしるす。

そのうちきりつばよりまほろしの巻までは、光君の年齢をもて巻をさため、匂ふの巻より宇治十帖にいたりては、薰大将の昇進をもて段々をわかてり。<sup>17</sup>

一条兼良は、物語の構造を読みとり、主人公の年齢に着眼して、巻ごとの年数の重複を把握して理解する。それが「年立（としだて／としだち）」という考え方の提案である。今日の物語読解の基礎となったものだが、兼良が従来の誤った年数計算のやり方の象徴として取り上げたのが、冷泉院の三年懐胎説であった。『源氏物語年立』紅葉賀の当該部では次のように記している。

・二月十余日藤壺女御御産男子事 / 冷泉院是也

／去年四月、藤壺里居之比、与源氏有蜜通事、則懐妊乃事あり。それよりことしの二月までは十ヶ月満也。然を原中秘抄に、横豎の年紀を不知して、冷泉院は、三年胎内におはしますと思ひて、羅睺羅尊者、六年耶輸陀羅の腹に有し事を例にいだせり。大あやまれる事也。

ここでは、冷泉帝の三年懐胎説が、ヤショーダラーのラーフラ懐胎説との類比に集約して批判されている。この点に注目したい。物語の叙述の理解としては兼良の述べる通りであろう。しかし、一方で、兼良が目撃しなければならなかったほど、冷泉院の生誕とブツダの子ラーフラの誕生とが並び語られた背景を、この言述は物語る。平井はそのことを次のように評価する。

〔行阿〕藤壺の御産（冷泉院誕生）の際二十六か月を費やしているとみて、古来この不思議を誰も指摘しなかったことを非難し、歴史上の先例を引用して神秘的な出産であると解釈している。この説は、やがて兼良によって徹底的に論破され、通常の一年余の出産とされるわけだが、「源氏物語」をこう読んでいたという史的証拠としては意義深い。巻序のとおり素直に並べて、年月もそれと同じく進行すると考えたこの「原中最秘抄」を一笑に付してしまうのは、早計ではないか。<sup>18</sup>

敷衍すればそれは、『源氏物語』の根幹をなす「妊娠小説」のプロットの把握に、中世の『源

<sup>17</sup> 『源氏物語年立』の引用は国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書による。

<sup>18</sup> 平井仁子前掲論文。

氏』読者がブツダ伝を意識し、「こう読んでいたという史的証拠」ともなる。

薫の場合はより直接的だ。光源氏の死を暗示する雲隠巻に続く匂兵部卿巻で、薫は、「幼ごこちにほの聞きたまひしこと」(=子供の頃、ほのかに自分の父が光源氏ではなく、柏木であるという噂)について、「をりをりをいぶかしう、おぼつかなく思ひわたれど、問ふべき人もなし」。とはいえ、母の女三の宮には問いただすべきことのできない「かたはらいたき筋なれば」、ずっと自分の心のうちで、出生の秘密を心にかけていた。そうして薫は「いかなりけることにかは。何の契りにて、かうやすからぬ思ひ添ひたる身にしもなり出でけむ。善巧太子の、わが身に問ひけむ悟りをも得てしがな」と「ひとりごたれたまひける」(匂兵部卿巻)。

この独り言の「ぜんげう(善巧)太子」(河内本では「くいたいし [=瞿夷太子])が誰を指すか。古来難読箇所であるが、中世の古注釈では、この太子を「羅睺羅」と解し、例の六年懐胎説と、大臣等がこれを疑ったこと、そして疑いはらすためにヤショーダラーが子を抱いて火中に投げ入れ、無実の誓いを証明した、という説話を引く<sup>19</sup>。薫の出生とラーフラ、そしてヤショーダラー不貞説とを重ね併せて読むことは、むしろ普通の読解であった。

こうした痕跡は、ブツダ伝と『源氏物語』の関係の解明に、大事な史的意味を持つ。

## 7 南伝の伝承が示唆すること——ブツダ伝に秘められたもう一つの「妊娠小説」

『源氏』読者が意識したブツダの「妊娠小説」の側にも、興味深い異伝があった。ジャータカなど、南伝仏教においては、ブツダが出家する1週間前に、すでにラーフラが生まれていたとする伝承が一般的であることだ。出生を喜ぶ父の王からその誕生を聞いたブツダが、「ラーフラ」(=障碍・束縛)が生じたと呼んで、それが命名の由来になったという。

「〈ラーフラの母〉が男子を出産された」ということを聞いて、スドーダナ大王が、「息子(ボーディサッタ)にわしの喜びを伝えよ」と使いをやった。ボーディサッタはそれを聞いて、

「ラーフラが生まれた。束縛が生じた」と言われた。王は、

「わしの息子は何と言ったか」とたずね、そのことばを聞くと、

「これからのちは、わしの孫をラーフラ王子という名にしよう」といった。(『ジャータカ全集』)

この南伝のブツダは、出家の当日、もう一度だけ我が子の顔を見ようと寝室に戻る。だが、子の頭をなでて熟睡する妻・ヤショーダラーの様子を見て、子を起こせば妻もめざめ、出家の妨げになる……。そう考えてあきらめ、ブツダはそっと城を出た。

2016年にしばらく滞在したタイのチェンマイやバンコクで、この図像をいくどか見た(一例を後掲する)。当地では一般的だが、逆に、東アジアでは、およそ見られない画像であるらしい<sup>20</sup>。

出家前に、すでにラーフラは生まれていた。これならヤショーダラーは無実だ。何の疑いも

<sup>19</sup> このことについては、前掲注4の拙著『かくして『源氏物語』が誕生する』第6章、304-5頁に言及し、その後注14所掲の拙稿で一連の資料を参照して詳論した。なお後掲の注22拙稿も参照されたい。

<sup>20</sup> 伝承としては、ブツダチャリタの漢訳『仏所行讚』や『仏本行集経』第55巻の「或説」に出家時にすでに羅睺羅は生まれていたとの説が記される。東アジアにおいても未知の説ではない。

発生しない、ようにみえる。敬虔な仏教国であるタイで話を聞いても、ブッダとヤショーダラーの関係にいささかの疑念を抱く人もないだろう……。ところが並川孝儀は、この背後に、次のような興味深い事情がありうることを示している。

ラーフラが「日食と月食のラーフという悪魔性を有した者」という語義を持ち、太陽と月を呑み込む悪魔であることを考える時〔……〕ラーフラという名は釈迦族の先祖である太陽神を呑み込む悪魔であり、釈迦族の家系を断ち切る悪魔性を有した者ということになる。ラーフラの出生にこの名が付けられたことは、この出生自体に釈迦続の家系を断ち切るほどの、或いは汚すという常識では到底考えられない事情が背景にあったと見做すべきであろう。〔……〕ラーフラの出生が釈尊の出家前の説の場合、この命名は釈尊の出家と関連したものであるという意義を有することになる。即ち、この立場はラーフラの命名に纏わる事情が釈尊の出家を促したのではないかという解釈を生む。〔……〕ここで、この命名の背後にある真意が何であったのかを探る一つの手掛かりを与えてくれるのが釈尊の成道時におけるラーフラ出生説での物語である。それは既述したように、ラーフラが釈尊の実子であることへの疑惑という驚くべき伝承の存在である。ヤショーダラーの釈明によって疑惑が晴れたと結ばれているものの、そこには実子ではないとの疑惑の伝承が間違いなく存在していたことだけは事実である。成道が出家後六年であると考えたら、常識的にラーフラは釈尊の実子であると理解することのほうが問題である。この成道時のラーフラ出生説が実子の疑惑を伝えることを勘案する時、もう一つの伝承である出家前のラーフラ出生説の背後にある深刻な事情もこれと同質の問題として理解できるかもしれない。いずれにしても、ラーフラの出生が釈尊の出家前であったとしたなら、実子でないという可能性を孕んだ、このような事情を背景とした出生が出家の原因になったものと考えられる。<sup>21</sup>

いささか臙化した表現で叙述されているが、つまりはブッダがなぜ出家したか。そのモチベーションを論じて、出家前に生まれたラーフラに、ブッダは、自分の子ではないと疑念を抱き、家の断絶やケガレの現実に厭世して出家した、という可能性を論じている。並川は、この論文を単著『ゴータマ・ブッダ考』（大蔵出版、2005年）に収録する際、ラーフラの出生がブッダの出家前だと伝える「南伝には実子でないことを疑う伝承はなく、上で論じた推測は成り立ちにくい」という注記を付加しつつも、上記の「実子でないことを疑う伝承」の「流布」が「間違いのない事実であり」、「ラーフラの出生とゴータマ・ブッダの出家との間に、何らかの関連があったのではないかという推測だけは依然として可能であるように思う」と述べた。確かにこの解釈は、ブッダの、いや仏教誕生の根幹を揺るがすパラダイムチェンジを内包する、大問題である。私はその語源論（ラーフラの語義をめぐる）や教学論争に参画する素養もゆとりもないが、しかし、並川がひとたび仏典の文献学によってたどりついた上記の解釈自体は、ブッダ伝というテキストの読みの可能性として、きわめて示唆的かつ有意義である。

ブッダの子とされるその男子は、不貞の子として唾棄すべきもの（ラーフラは束縛し、<sup>しょうがい</sup>障碍する者、あるいは悪魔の子）であった。そしてその子を抱きしめて目を閉じる妻……。あの子は本当に私の

<sup>21</sup> 並川孝儀「ラーフラ（羅睺羅）の命名と釈尊の出家」『佛教大学総合研究所紀要』第4号、1997年。

子なのか？ この図像学を少し工夫して『源氏物語』に落とし込めば、『源氏物語絵巻』柏木巻、実子ならざる薫を抱きしめる光源氏が形象される。

手塚治虫は漫画『ブッダ』の中でこのエピソードを描き、子を抱きながら、次のように祈りをこめるヤショーダラーを描いた。

シッダルタ  
 あなたがこの子を見て  
 この国を出て  
 いってしまうなんて心が  
 どうぞ どうぞ  
 消えますように……<sup>22</sup>



タイ・チェンマイの Wat Phra That Doi Suthep にて撮影。

あえて文脈を取り違え、妻は、「この子を見て、この国を出ていってしまうなんて心」を持つブッダを危惧していると、このセリフを読んでみよう。チェンマイで見た画像では、ベッドでラーフラを抱きながら眠るヤショーダラーを、遠くから、不安そうに眺めるブッダを描く。

その子は、オレにとって何なのか。もちろん愛子であり、<sup>ほだ</sup>絆しであり、障碍であり……。いや、自分を裏切った女が生んだ不貞の子、悪魔の子？ こうした創造的誤読は自然である。

漢訳仏典の読者は、ヤショーダラーにかけられた不貞の噂（6年の懐妊）とともに、『仏所行讃』や『仏本行集経』に記述された、出家時にはすでにラーフラが生まれ、それを見届けてブッダが出家の旅に出る、という逸話（注20参照）とを併せ読む僥倖に恵まれていた。日本の思想風土の中で、ブッダ伝を相対化して読むことのできる批判的読者なら、その二つを併せて、並川が推定するようなコンテクストを紡ぎ出すことはたやすい。

出家の夜、妻が抱く我が子は実子ではない、という確信を抱くブッダの姿。それは露骨なほど、冷泉帝を抱く桐壺帝、そして薫を抱いて「自嘲」を眩く光源氏とオーバーラップする。たとえ南伝のような逸話を『源氏物語』作者が読んでいなかったとしても、すでに根強い不貞・出産説に彩られたブッダ伝の愛読者が、生まれ抱かれた我が子が、じつは実子ではないという物語の核心となる種・シーズを、ブッダ伝から汲み取ることはさほど難しいことではないはずだ。日本の古代・中世社会において、根幹的な役割を果たした宗教である仏教の教祖・ブッダの伝記の影響は、これまで以上に強調すべきである。そしてその内実については、物語的想像力を踏まえて、従来の枠組みに囚われない、多様で幅広い読み取りが必要であろう。そのことを確認して本稿を閉じたい<sup>23</sup>。

<sup>22</sup> 引用は潮ビジュアル文庫（全12巻、1992-93年）による。

<sup>23</sup> 本稿は、拙稿「出家譚と妻と子と——仏伝の日本化と中世説話の形象をめぐって」（小峯和明編『東アジアの仏伝文学』勉誠出版、2017年）とも問題意識と対象文献において関連する部分がある。併せ参照されたい。